



ギリシャ星座周遊記

橋本武彦 (写真・文)

地人書館 B5判 2,800円+税 224頁 解説書

読み物
お薦め度
4
☆☆☆☆★

2010年夏某日。朝3時半起床。近くの神社のお山にカブトムシを取りに行く。クヌギ林の間からオリオン座が昇って来るのが見える。冬のキリリと冷えたなか見ることが多いオリオン座だが、こうしてじっくりした熱気に浮かぶオリオンもまた格別である。(それにしても今年の夏は暑かったですね。夜明け前でも30度近くありました。)普段見なれた星座を違う季節に見るだけで、法悦な気持ちになれるのだから、違う国で見たらどんななんだろう。

ギリシャの緯度は日本とだいたい同じぐらいなので、見える星空も名古屋とさほど変わらないはず。でも地中海性気候の国なので、冬に雨が降るかわりに夏は晴天乾燥。きつと夏の天の川は、くっきりシャープにほんとの川みたいに見えるんだらうなあ。

そんなことを想いながら読んでみたのが本書である。本書はギリシャ滞在歴が長いカメラマン橋本武彦氏による、古典文献に基づく星座研究をまとめたものである。「月刊天文」(残念ながら現在休刊中)の連載記事なのでご存じの方もいらっしゃるかもしれないが、本書用に大幅に改訂され

ているとのことである。

実際にギリシャ古典の文献を読み、当時の星座観を素のまま感じ取ろうというところから始めている。現在広く流布している星座神話は、以降のローマ時代に修正を加えられたものが多いため、本書で登場する星座物語は(少なくとも私にとって)目新しいものであった。本書の魅力はこのような玄人用の星座物語にとどまらず、味わい深い旅行記にもなっているところであろう。古代の星の配置(恒星の固有運動により星座の形が変わったり、地球の歳差運動などにより位置がずれたりする)から古典文献をひもといたと思ったら、真夜中のサソリ遭遇記(当然「さそり座の章」)や、安宿でのダニ退治奮闘記(なぜか「へびつかい座」の章、理由は本書を読めばわかります)になったりする。

そして何といってもプロのカメラマン、星空から神殿の写真まで圧巻の一言。暑くて眠れない夜に面白そうな章から選び読み進めたが、読後の何とも言えない清涼感とともに、気持ちよく眠りについた酷暑の夏でありました。

鈴木 建(名古屋大学 大学院理学研究科)